

The efficacy of the postnatal nasogastric tube position as a prognostic marker of left-sided isolated congenital diaphragmatic hernia

河野, 淳

<https://hdl.handle.net/2324/6787511>

出版情報 : Kyushu University, 2022, 博士 (医学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)



氏名： 河野 淳

論文名： The efficacy of the postnatal nasogastric tube position as a prognostic marker of left-sided isolated congenital diaphragmatic hernia

(左孤発性先天性横隔膜ヘルニアにおける予後規定因子としての出生後の胃管位置の有用性の検討)

区分： 甲

論文内容の要旨

【目的】先天性横隔膜ヘルニア（以下CDH）において出生前の胃の位置は信頼できる予後予測因子であるが、出生後の胃の位置について述べた研究はほとんどない。我々は出生直後の胃管の位置について検討した。

【対象と方法】日本CDH研究グループのデータベースを用いて、多施設共同の後方視的観察研究を行った。データベースに登録されている15年間1037例中、出生前診断のある左isolated CDH 464例を対象とし、出生直後の胃管の位置が横隔膜より下にある群（BD群；n=190）と横隔膜より上にある群（AD群；n=274）の2群にわけ、比較を行った。主要評価項目は90日生存率とし、副次評価項目は人工呼吸期間、在院日数、再発率とした。

【結果】BD群はAD群よりも有意に90日生存率が高く（98.4% vs. 89.4%, $p<0.001$ ）、人工呼吸期間が短く（11 vs. 19日, $p<0.001$ ）、在院日数が短く（38 vs. 59日, $p<0.001$ ）、再発率が低かった（ $p=0.002$ ）。多変量解析ではBD群が90日生存に対する予測因子であることが示された（調整オッズ比, 3.68; 95%信頼区間, 1.02-13.30）。

【結論】左isolated CDHにおいて胃管の位置は予後予測因子であり、臨床においても検討すべき項目である。